

徳島を四国観光の 玄関口に

観光地域づくりは、近年急増が続くインバウンド観光客の取り込みが鍵を握っており、空港の活用が課題となります。祖谷では高松空港経由のインバウンド観光客の取り込みに成功したほか、県では徳島阿波おどり空港に新ターミナルを整備し、国際定期便就航に向けた取り組みを行っています。

もっとも、インバウンド観光客取り込みの成否は、徳島に近い空港の中でインバウンド観光客の利用人数が圧倒的に多い関西国際空港をいかに活用するかにかかっています。しかし残念なことに、ある調査によれば、関空経由で入国した外国人のうち、四国を訪問する人の割合は1%程度と、素通りに近い状態です。

これは徳島や四国に魅力がないからでしょうか？決してそんなことはありません。ただし、関西国際空港に来るインバウンド観光客に、最初から徳島や四国だけを目指して来てもらうという発想は、変える必要があるかも知れません。インバウンド観光客にはあくまで関西を目指してもらい、関西を巡っているつもりで一緒に徳島や四国を楽しんでもらえばよい、と柔軟に考えるのです。

一例が、ユニバーサル・スタジオ・ジャパン(USJ)と鳴門の渦潮、大塚国際美術館を結ぶ広域観光ルートの開発です。東京を訪れるインバウンド観光客にとって、日光を巡ることは同じ東京圏の中での旅であるとの認識ですが、USJから大塚国際美術館への距離は、東京から日光へ行くより近いのです。それならば、インバウンド観光客に、USJと鳴門の渦潮、大塚国際美術館を巡る旅を、関西にある「ひとつの広大なテーマパーク内にある、さまざまな施設やスポットを巡る旅」であると思ってもらうことは十分可能でしょう。

インバウンド誘致の専門家であるフレンドリー・ジャパンの近藤剛社長は、これを例えば「渦潮オーシャンライン」など分かりやすい名称でブランディングし、各施設をつなぐ外国人専用のシャトルバスを運行させれば、家族連れインバウンド観光客の新たな定番ルートになるだろう、と語っています。

もしこれに成功し、鳴門に大勢のインバウンド観光客が押し寄せるようになれば、いよいよ日本版DMO(観光地域づくり法人)の出番です。県内のそれぞれの地域をカバーする3つのDMO(県東部の「イーストとくしま観光推進機構」、県南部の「四国の右下観光局」、県西部の「そらの郷」)が単独または連携して開発した観光ルートを、鳴門に来たインバウンド観光客が巡るような展開になれば、徳島と四国の観光は、新たな時代を迎えることでしょう。

詳しくは、「徳島を四国観光の玄関口にする～渦潮オーシャンライン構想(試論)～」のレポートをご覧ください。